

コロサイ人への手紙1章19-29節 「御子の体にある働き」

1A 受肉による和解 19-23

1B 万物との和解 19-20

2B 私たちとの和解 21-22

3B 福音の望み 23

2A 苦しみの中での宣教 24-29

1B 教会のため 24

2B 神の奥義 25-27

3B キリスト者の成熟 28-29

本文

コロサイ人への手紙 1 章 19 節からです。午前礼拝で、15 節から 20 節までが、おそらく初代教会の人たちが聖歌として歌っていたかもしれないと言われる箇所、その続きになります。15 節から 18 節までは、御子が、すべてのことにおいて第一となっておられるということを見ていきました。そして 19 節からは、その第一の方が肉体を取られて私たちの間に住まわれていることを、パウロは強調しています。そのことによって、万物が神と和解している、つまり平和が与えられることを教えています。

なぜ、御子が肉体を持っていることをパウロがここで強調しているかといえば、ギリシア哲学の一つであるグノーシス主義が教会の教えの中に入り込んでいたと考えられるからです。グノーシスとは、知識、あるいは霊知とも訳されます。知識を持つことによって、自分は特別な存在となるという教えです。一種のエリート主義です。霊は善であるが、肉は悪であり、それゆえ肉体は元々、悪だから、神はそこに関わっていないという考えです。世において、知識の巨人と呼ばれる人々、知識人として有名な人が、人間としてはとんでもない生活をしていたというのは、よく知られた話です。けれども、知識があることそのものが大事なので、グノーシス主義では問題ないのです。

それが教会に入ると、どうなっているかと言いますと、イエス・キリストが肉体を取らなかった、体があるように見ただけでそうでなかったとします。仮に現れると書いて仮現説と言います。このような異端が使徒たちの生きていた時には教会に猛威を振るっていたようです。ヨハネは、何十年も経っているのに、改めて福音書を書いたのは、この方が神であるのに肉体を取られたということを書くためであったとも言われています。その偽りの教えを垂れて、仲間から出ていく者たちを反キリストだと断じているのが、ヨハネによる第一の手紙です。

なぜ、キリストが仮に現れるのではなく、肉体を取っておられたことが大事なのか？なぜ、その

仮現説を異端とし、そこまで戦わないといけないのか。その理由を、19 節以降で見えていくことができます。結論から言いますと、キリストが教会におられるということをなくしてしまうからです。そこにある平和、神との和解がなくなってしまうことです。また、肉体における苦しみの実意が、失われてしまうからです。

1A 受肉による和解 19-23

1B 万物との和解 19-20

¹⁹ なぜなら神は、ご自分の満ち満ちたものをすべて御子のうちに宿らせ、

これは、人としてのキリストが、神と等しい性質を持っていたことを示しています。イエスが人であって、かつ神であるということです。ある人が、御子について分かりやすい説明をしていました。「羊の子は羊、神の子は神」というものです。羊の子が羊より何か劣るとか、羊から外れた種類になることはありません。すべて受け取って、それでその子が存在します。同じように、御子は神ご自身で、それ以下ではないのです。

神でなければ、次にパウロが語る、平和や和解などないのです。イエスが何かすぐれた霊的存在にしかすぎなかったら、どうやって、神と人との間にある仕切りを埋めることができるのでしょうか？ヨブ記を読んでみてください、ヨブは自分がどんなに正しく生きても、全能者と人との間には大きな開きがあることを述べています。「9:33 私たち二人の上に手を置く仲裁者が、私たちの間にはいません。」完全な平和、また和解をもたらす仲介者は、完全で神でなければいけないのです。

「ご自分の満ち満ちたもの」というのは、とても良い表現ですね。ギリシア語では、「プレロウマ πλήρωμα」といいます。共同訳では、「満ち溢れるものを、余すところなく」と訳されています。神のご性質をいくらかあずかっているというものではありません。父なる神の満ち溢れるものを余すところなく、すべてを御子に宿らせているのです。これはグノーシス主義者らが、「神の力と性質を合算した表現」として使っていたそうです。あるものはこれだけの神的な性質があって、また別のもは、あれだけの神的な性質があります。それらをすべて合算したのが、プレロウマです。パウロは、この表現を使っているのです。キリストはその合算なのだ。つまり、神のご性質のいくらかを受け取った神的存在ではなく、そのあらゆるすべてを受け取っているということです。

²⁰ その十字架の血によって平和をもたらし、御子によって、御子のために万物を和解させること、すなわち、地にあるものも天にあるものも、御子によって和解させることを良しとしてくださったからです。

私たちは、14 節で贖いについて、十字架の血について見ました。そこには、キリストが私たちに対する神の御怒りを受けてくださって、いのちを注いでくださいました。血はいのちそのものです。

「レビ 17:11 実に、肉のいのちは血の中にある。わたしは、祭壇の上であなたがたのたましいのために宥めを行うよう、これをあなたがたに与えた。いのちとして宥めを行うのは血である。」そして、それが平和をもたらしているというのです。

そして非常に興味深いのは、「万物を和解させる」とあります。アダムが罪を犯したことによって、神と人との間に、また神と被造物との間にずれが生じました。調和がなくなりました。「創世 3:17 大地は、あなたのゆえにのろわれる。」とあります。平和がなくなり、敵意が生まれてしまったのです。それをキリストが御子であられるのに肉体を取られ、その肉体にある血が流されることによって、被造物との間に平和がもたらされます。

午前礼拝で、御子が、死者の中から最初に生まれた方であることを学びました(18 節)。御子にあって神は万物を造られましたが、その被造物が神のみこころにかなわないものとなりました。神の被造物には、そのご性質と栄光はありますが、しかし、うめいています。「ロマ 8:22 私たちは知っています。被造物のすべては、今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみをしています。」私たちは今、被造物が本当にうめいているのを、地震や気候変動、疫病などで、いろいろ見えますね。しかし、この方がよみがえらえたことによって、まず信じている者たちがよみがえり、そして天地がすべて新しくされます。新しい創造の始まりが、御子にあって起こったのです。

その新しい創造にある世界は、神との平和があります。神に完全に調和しています。しかし、そこには犠牲がありました。御子ご自身が肉体を取られ、そこで血を流されたから可能なのです。血が流されたので、神の御怒りはこの方にすべて置かれました。あの十字架は、私たちの罪のために死なれたものだけでなく、被造物全体が、万物が神と和解する場でもあったのです。そして、その平和に満ちた世界をこの方の復活によってもたらしてくださいました。ですから、教会は神の平和が満ちているところです。それは、将来の新天新地にある正義と平和が、御霊によって一部、現れているところです。先取りしているところです。

もし、キリストが肉体を取られていなかったら、その贖いが成し遂げられなかったのです。仮に現れているだけならば、そこに血は流れされることはありませんでした。血が流されることによって、初めて平和が成し遂げられたのです。キリスト教会にグノーシス主義的なものが入ってくるというのは、私たちが肉体において犠牲を払わないところにあります。愛というのは、言葉だけでなく、行いと真実があります。もちろん音声や動画でも、ある程度は分かるでしょう。けれども、肉体を持ってきているからこそ、そこに愛の犠牲があるからこそ、私たちは平和を知ることができます。

今日の時代の悲劇は、それが仮想に変えられていることです。アニメのキャラと結婚式を挙げている人の話がニュースになりました。これは悲劇です。そこまでいかなくとも、コンビニの弁当と母親の弁当の味の違いは、だれが見ても歴然としています。物質的な味だけではないのです。キ

リストが肉体を取られたのは、そういったことなのです。平和が事実、私たちに実現するためです。

2B 私たちとの和解 21-22

²¹ あなたがたも、かつては神から離れ、敵意を抱き、悪い行いの中にありましたが、^{22a} 今は、神が御子の肉のからだにおいて、その死によって、あなたがたをご自分と和解させていただきました。

被造物が、アダムの罪によってうめきの中に置かれていましたが、私たち人間はアダムの子として、その性質を受け継ぐ者として、神から離れ、敵意を抱き、悪い行いの中にいました。神に対して敵であったのです。大事なのは、私たちが神から離れたということです。和解するといっても、私たちが和解を受け入れるのであって、神は和解してくださっているということです。神を怒らせないために、自分が悔い改めて信じて神がその怒りを鎮める、ということではないのです。神はキリストにあってその怒りを既に置かれたのです。だから、神はちよんご自身を御子にあって痛めつけ、その傷によって、私たちに和解の手を差し伸べています。私たちは受け取るだけです。

そしてパウロは、「御子の肉のからだ」と言っています。御子の肉とだけではなく、御子のからだ、とだけでもなく、肉のからだと言っています。紛れもなく、この方が肉体を持っておられることをパウロは、グノーシス系の異端に対して反駁しているのです。そして、その肉体の死によって、初めて神との和解が成し遂げられたのです。使徒ヨハネも、福音書で反駁しています。「ヨハ 19:33-35 イエスのところに来ると、すでに死んでいるのが分かったので、その脚を折らなかった。34 しかし兵士の一人は、イエスの脇腹を槍で突き刺した。すると、すぐに血と水が出て来た。35 これを目撃した者が証している。それは、あなたがたも信じるようになるためである。その証しは真実であり、その人は自分が真実を話していることを知っている。」血と水が出てきました。これで、この方が肉体を持っていることが証しされたと強調しているのです。

^{22b} あなたがたを聖なる者、傷のない者、責められるところのない者として御前に立たせるためです。

神は、聖なる方です。聖なる方の前に立つのに、罪があれば、その場で滅んでしまいます。主がシナイ山に降りて来られた時に、忠告を与えられました。「出 19:12 あなたは民のために周囲に境を設けて言え。『山に登り、その境界に触れないように注意せよ。山に触れる者は、だれでも必ず殺されなければならない。』それで、キリストが聖なる神の前で死なれることによって、代わりに罪人であった私たちを聖なる者としてくださいました。そして続けての表現は、神の前に献げられるいけにえの特徴を表しています。傷のないもの、欠陥のないものが、牛や羊の中から選ばれなければいけません。同じように、私たちが聖なる者になり、傷もなく、責められるところもない者として、御前に立つようになります。

3B 福音の望み 23

それが実現するのは、主が再び私たちのために戻って来られる時です。主が戻られる時に、私たちは一瞬にして変えられます。そして、キリストの裁きの座の前に立ちます。そこで報いを受け取ります。この望みを抱いて信仰に留まらないといけないことを、パウロは次に話します。

^{23a} ただし、あなたがたは信仰に土台を据え、堅く立ち、聞いている福音の望みから外れることなく、信仰にとどまらなければなりません。

ここが、キリスト者の務めであります。キリストについて聞き、それを信じました。その福音にある望みを抱くことこそが、私たちキリスト者がしなければいけないことです。イエス様が、群衆に「神のわざを行うためには、何をすべきでしょうか。」と尋ねられました。「神が遣わした者をあなたがたが信じること、それが神のわざです。」と言われました。(ヨハネ 6:28-29) 信じることなんですね。

けれども、多くの人が群衆のように考えます。「信じるのはわかった。でも、他に何かしないといけないんじゃないの?」と。そうではないんです。彼らは、パンを求めてイエス様の追っかけをしていました。イエス様は、「わたしが、いのちのパンです。」と言われました。イエスに信頼して生きることを促されたのです。それで彼らはつまずいたのです。信じること以外の、違うものを求めていました。この方を信じる信仰だけで満足しないのです。それで、他のものが必要だとなって、いろいろ求めさせる異端が、コロサイにも入りました。

^{23b} この福音は、天の下のすべての造られたものに宣べ伝えられており、私パウロはそれに仕える者となりました。

ここで初めに戻って、パウロは福音が世界に広がっていることを述べています。1章6節で、「世界中で起こっている」と言っています。ここ23節では、世界の人々のみならず、「天の下のすべての造られたものに宣べ伝えられて」いるとあります。すべての造られたものが、御子にあって神と和解するのですから、人々のみならず、被造物全体が福音の対象になっているのです。

そして、「私パウロはそれに仕える者となりました。」と言っていますが、次24節から、パウロが福音宣教者として、苦しみをもって神に仕えている姿を示しています。

2A 苦しみの中での宣教 24-29

1B 教会のため 24

²⁴ 今、私は、あなたがたのために受ける苦しみを喜びとしています。私は、キリストのからだ、すなわち教会のために、自分の身をもって、キリストの苦しみの欠けたところを満たしているのです。

パウロは今、ローマの牢に入っています。このことについて、パウロは、ピリピ人に対しても、またエペソ人に対しても、この事実を積極的に受け止めている話をしていました。ピリピ人に対しては、親衛隊に福音が伝わっているということです。そしてエペソ人に対しては、ローマで苦しみを受けているのは、異邦人への宣教のゆえにそこに捕まえられているのであり、エペソの人たちはその福音で救われたのだから、私にとっては栄光なのだ、という見方をしています。

ここコロサイにおいても、「あなたがたのために受ける苦しみを喜びとしています」としています。コロサイ人たちの多くも異邦人ですから、彼らのために苦しみを受けていると言ってよいのです。一般のコロサイの人たちの、苦しみについての考え方は、「これは、呪われている」というものだったでしょう。地震が起こったら、それは神々から罰があたったのだとみなしました。苦しみがあつたことは、それは罰が当たっているというような見方です。前回学んだように、私たちは何か状況が苦しくなると、それは神が恵みをもって私たちを見てくれないとみなしてしまいます。

しかし、そうではないのです。ここが、この学びにおける、最も大切なところでしょう。キリストのゆえに苦しんでいるということは、私たちはキリストの苦しみというものを、自分たちの身に受けているという積極的なものなのです。キリストの苦しみには、愛があります。聖さがあります。神の正義があります。苦しみというものを、呪われているようにみならず考え方とは裏腹に、キリストにある者たちは、それをキリストの苦しみとの交わりとみなすのです。ですから、そこに一種の喜びがあるのです。主のゆえに、その御名のゆえに苦しみを受けているのだという、聖なる喜びです。

それがここでパウロが、話していることです。「キリストのからだ」といって、さらに、「自分の身をもって」と言っています。からだを強調しているんですね。自分の肉体が今、ローマの牢で制約を受けています。肉体で起こっていることが、キリストのからだにおいて、その苦しみの一部になっています。みなさんが、もし、何か苦しいこと、試練を受けていることがあれば、それはそのまま、キリストのからだの苦しみを満たしているのです。

2B 神の奥義 25-27

²⁵ 私は神から委ねられた務めにしがたって、教会に仕える者となりました。あなたがたに神のことばを、²⁶ すなわち、世々の昔から多くの世代にわたって隠されてきて、今は神の聖徒たちに明らかにされた奥義を、余すところなく伝えるためです。

神のことばを伝えることについて、パウロは神から委ねられています。コリント第一 4 章で、パウロは、自分たちは管理者であると言っています。「I コリ 4:1-2 人は私たちがキリストのしもべ、神の奥義の管理者と考えるべきです。その場合、管理者に要求されることは、忠実だと認められることです。」神から啓示として与えられた奥義を、自分が付け足したり、差し引いたり、改変することなく、そのまま忠実に伝えていく、ということです。

そして、それが、「神の聖徒たちに明らかにされた奥義」ということです。聖書の知識について、私たちが間違っはいけないのは、それが、神が明らかにするというものです。本質的には、私たちが自分の知的な能力によって知ることはできないということです。神は敢えて、ご自分のことを隠されることもあるのです。「申 29:29 隠されていることは、私たちの神、【主】のものである。しかし現されたことは永遠に私たちと私たちの子孫のものであり、それは私たちがこのみおしえのすべてのことばを行うためである。」そして、神が示そうと願われている時に、示されるのです。イエス様は、弟子たちについてこう言われました。「マタ 11:25 そのとき、イエスはこう言われた。「天地の主であられる父よ、あなたをほめたたえます。あなたはこれらのことを、知恵ある者や賢い者には隠して、幼子たちに現してくださいました。」

そして奥義というのは、これまで神が隠していたけれども、今、明らかにしていること、という意味になります。主は、すぐにご自分のなされることを明らかにされませんでした。少しずつ、イスラエルの民に明らかにされました。そうやってメシアが来られた時に、この方こそが道であり、真理であり、いのちなのだと思えることができるように、用意されました。律法を与え、預言者たちを遣わされました。

そして、ユダヤ人にとっては衝撃だったのは、自分たちの約束に異邦人も加えられるということです。エペソ人への手紙で、パウロが奥義について説明しましたね。「3:6 それは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人も共同の相続人になり、ともに同じからだに連なって、ともに約束にあずかる者になるということです。」どれだけ、このことにユダヤ人たちが受け入れがたかったかは、ペテロがコルネリウスのところに導かれたところに現れていました。天からの幻を、異邦人が救われることを象徴している、汚れた動物が天からふろしきに入って降りてきた幻を、三度、「主よ、私は汚れたものを、食べません。」といて、拒んだのです。そして、パウロが迫害を受けたのは、イエスがメシアだと宣べ伝えたこともそうですが、異邦人が異邦人のままで信仰によってのみ、救われると伝えていたことで、迫害されていたのです。

²⁷この奥義が異邦人の間でどれほど栄光に富んだものであるか、神は聖徒たちに知らせたいと思われました。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。

奥義というのが、いかに栄光に富んでいるかということ、それは、「あなたがたの中におられるキリスト」であります。教会がキリストのからだであり、キリストが私たちの間に住んでくださるということ、万物を造られて、新しい創造の始まりであられる方が、私たちの間に住んでくださるということなのです。ものすごいことです。ユダヤ人たちにとって、神殿が神の住まわれるところでした。けれども、私たち自身のからだ、個々人もそうですし、何よりもからだを集めているところに、聖霊が住まわれ、そこにキリストが住まわれるのです！だから、どれほど私たちが集まるのが大切でしょうか？お話を聞くところが、礼拝ではないのです！礼拝は、私たちの間に住まわれるキリストです。

そして、後にキリストが戻って来られて、天の栄光の中に入り、自分たちも栄光の姿に帰ら得ます。それで、「**栄光の望み**」と**いって、将来のこととしても語っています。**

そして先にお話したように、「**異邦人の間で**」ということが、とてつもないことなのです。神は、ユダヤ人たちを聖徒にして、ユダヤ人であることが、アブラハムの子孫で契約の民、聖なる民としていると彼らは思っていました。しかし、神のご計画の中では、それ以上の大きな意図がありました。それは、すべての人が神の憐れみを知る、ということです。そのために、神はイスラエルをまず、選ばれました。そのことによって異邦人がいかに罪深いかを知るためです。しかし、ユダヤ人が、自分たちがいかに救いが必要であるかを知るために、異邦人にも救いを及ぼしたのです。そして、今度はユダヤ人たちが、初めに選ばれた**選びのゆえに神が救われます。**すべての人が、自分**は罪人だと悟り、すべての人が神の憐れみを受けるために、そうされたのです。**

その共同体が、地上において教会として生まれさせました。だから、異邦人がユダヤ人と共にキリストにあって一つになって神を礼拝するというのは、神のサプライズなのです。ユダヤ人たちが驚くのは言うまでもないのですが、使徒たちは少しずつ、神の恵みの大きさと広さに驚きながら、その奥義を受け入れ、管理していったのです。

3B キリスト者の成熟 28-29

²⁸ 私たちはこのキリストを**宣べ伝え、あらゆる知恵をもって、すべての人を諭し、すべての人を教えています。**すべての人を、キリストにあって成熟した者として立たせるためです。

パウロは、キリストを宣べ伝え、また諭し、教えてきました。あの手、この手でやってきたのです。それにはただ一つの目的がありました。「**キリストにあって成熟した者として立たせるため**」であります。霊的な成長であります、彼らについて、その信仰と愛についてパウロは、神に感謝していました。彼らは主に対して忠実でした。しかし、**霊的な成長が必要なのです。**

霊的に成長していないことの特徴は、**教えの風に吹きまわされること**です。「エペ 4:14-15 こうして、私たちはもはや子どもではなく、人の悪巧みや人を欺く悪賢い策略から出た、どんな教えの風にも、吹き回されたり、もてあそばれたりすることがなく、むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において、かしらであるキリストに向かって成長するのです。」コロサイ書には 2 章から、これら**教えの風**について数多く出てきます。パウロは、2 章以降で、ここで言っているように、あらゆる知恵をもって諭していきます。

私は、19 歳の時に信仰を持ちました。そして今に至るのですが、生まれた時から 19 歳で信仰を持つまでに、どれほどの世の教えに晒されてきたかといえば、あまりにも膨大です。その、全くキリストの教えとは関わりのない中に生きていて、信仰をもっても、その全く関わりのない環境は

変わらないのです。自分が、みこころが何かをどれだけ知っているのかが分かりません。いつの間にか、世の教えに追従していることもあるのです。主にふさわしい歩みというのも、全く新しいことであり、神を知らない異邦人のように歩んでしまうことも多々あります。そこで知識と知恵が必要なのです。すべての歩みに、そしてすべての思いに、キリストがそこに生きているか？その問いに答えるには、キリストに向かった成長が必要なのです。神を知らない異邦人たちが生きている中で、キリストにあって生きるには、多くの教えと諭しが必要となります。

²⁹ このために、私は自分のうちに力強く働くキリストの力によって、労苦しながら奮闘しています。

ピリピ書でも学びましたね、私たちは労苦するのですが、それは私たちの内にキリストが働いてくださっているからです。「2:13 神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださる方です。」そして、奮闘します。この奮闘の訳はとて良く、ギリシア語は運動選手の競技のような奮闘を示しています。次回、2章の始めで、パウロがコロサイの人たちのために、どれだけ苦闘していくのかを見ていきます。

ここまでパウロが、労苦して奮闘して書いてくれている手紙を、私たちも熱心に読んでいくべきですね。コーチがどんなにすばらしくても、選手がやる気がなければ元も子もありません。あらゆる知恵を尽くして、キリストを宣べ伝え、諭氏、教えてくれているのですから、私たちも、キリストの恵みと知識において成長して、この方において成熟に向かうことに真剣でありたいですね。